

## インタビューとコミュニケーション

川 浦 康 至

### インタビューの発見

ある時期から、授業でインタビュー法を取り上げるようになっていた。

話は二十年前にさかのぼる。

一九九九年三月、『フィールドワークの技法と実際―マイクロ・エスノグラフィ入門』がミネルヴァ書房から出版された。お茶の水女子大学（当時）の箕浦康子先生の授業「フィールドワーク」の記録集である。全体は大きく二部に分かれ、巻末には、一九九七年度の授業スケジュールと観察課題が付録で載っている。前半（第一部）は、六章からなる「フィールドワークの技法」である。そのうち第五章までが講義録で、第六章が受講者の実践記録である。後半（第二部）の「マイクロ・エスノグラフィの実際」も同じく六章からなり、教え子たちの実践研究が並ぶ。その最終章の執筆者が見覚えのある名前だった。佐藤達哉さん、私

コミュニケーション科学 五二号

と同窓だ。内容は、この授業の一年にわたる参加観察だった。ということとは、私も聴講できるかもしれない。その後、箕浦先生に聴講を申し出たところ、幸いにも快諾を得られた。時間割の都合から、実際に受講したのはその二年後、二〇〇一年度だった。

待望の四月。初回の火曜二限、早めに行ったつもりだったが、すでに席はいっぱいだった。聞けば、この授業は選択科目だという。それにもかかわらず、こんなに受講者がいる。ざっと六十人ぐらいだろうか。席を探していると、同年代の男性の姿が目に入った。「同好の士」は私だけではなかったようだ。

授業は『フィールドワークの技法と実際』をテキストとして進行し、数回進んだあたりでインタビュー調査の回に入った。以下、テキストの記述も引用しながら、そのときのような紹介しよう。

三人ずつに分かれ、話し合いでインタビューの主題を決める。ついでインタビュー・スケジュールを考える。「研究目的を達成するためには、どのような質問をするのがよいのかドラフトを作成する」作業である。完成したら、グループ内で、トレーニング

を兼ねたインタビューを行い、検討を重ねる。具体的には、「意味がつかみにくい質問とか答えにくい質問がなかったか、自分が欲しいデータが取れるような的を射た質問になつていくかどうか」を検討し、インタビュー・スケジュールを最終的に完成させる。

インタビュー・トレーニングでは、三人が、それぞれインタビュアー（面接者）、インタビュイー（被面接者）、オブザーバー（観察者）に分かれ、各役割を一回ずつ経験した。なかでも肝はオブザーバー経験だろう。

オブザーバーは目の前にいる二人のやりとりを介入することなく観察する。つまり傍観者としてインタビューに参加する。「面接者と被面接者の両方を、経験することで、一つの質問に対してさまざまな反応が出てくることを目の当たりにすることがこの訓練の一つの目的である」。そこにインタビュー場面を相対化する機会が加わる。私だったらこう聞くのになあ、あるいはこう聞くとき、こう受け取られるのか、と得られるものは多い。

メタ認知を促す観察者経験は、インタビュアーのときもインタビュイーのときも活きる（学生は就職面接で役立つはずだ）。またインタビュー記録の作成を考えると、オブザーバーは読者のような存在でもある。

一連のトレーニング経験は、私にとつてインタビューの価値を知るのに十分だった。インタビュー場面では、こんなにも会話がはずむのか、スムーズに行くのか。

授業での実習という理由はある。いろいろ答えてもらわない

ことには書くことがないし、質問にきちんと答えないと相手に悪い、そんな気持ちはずすと湧く。また、それ以上にインタビューの目的を共有していることは大きい。だが、はたしてそれだけだろうか。もしかすると、インタビューという設定には、コミュニケーションを促すはたらきがあるのではないだろうか。

相手にたずねる。それに相手が答える。それを受けてこちらが話す。すると、相手も返してくる。自分の話を聞いてくれているという実感がなせる技だろう。

当時、新聞でこんな記事を目にした。そこに書かれていたのは、ある中学生が暴力団に入り補導されるまでの経緯だった。中学生は、入ったきつかけをこう語った。「その人に喫茶店に行こうと誘われました。喫茶店で、その人は私の話をじっと聞いてくれました。この人の言うことであれば、信じられると思ったのです」。女子中学生にとつて、彼は自分の話を聞いてくれる、いいおじさんすぎなかった。

インタビューはコミュニケーションの原点を意識させる。言い換えると、コミュニケーションの基本がインタビューに凝縮されている。「コミュニケーションで悩む人たちにインタビュー教育は有効かもしれない、と思ったほどである。

学生たちとのインタビュー・トレーニングでは、思いもしなかったことがひらめいたり、そういえば、とこれまで気づかなかつたことが意識されたりもした。聞けば、学生たちも同じだということ。それがおもしろく、楽しい。新たな発見と理解の深まりがある。

インタビューは既にわかっていることの交換にとどまらない。互

いに発見(ごっこ)をしているような感覚と言えばわかってもらえるだろうか。この実習では、インタビュ어의創造的側面も学んだ。

## インタビュ어はインター・ビュー

インタビュ어教育の経験は、インタビュ어について考えるきっかけをもたらした。

インタビュ어とはなんだろう。

たとえば『岩波国語辞典』にはこう書かれている。「面会、面接。特に、新聞や雑誌の記者が記事をとるための、会談」。無論、私が「フィールドワーク」で経験した興奮は反映されていない。他の辞書も同様だろう。では、もとの言葉「interview」はどんなのか。『ジーニアス英和辞典』を見てみた。

interview **【名詞】**①(公式の)会見、会談、(就職などの、もしくは人との)面接、面談、(医者)の診察。②(記者などの)インタビュ어、取材訪問、聞き込み。③訪問「会見」記事。

**【動詞】**〈人〉と会見「面談、面接」する、…を取材訪問する、聞きこみ捜査をする。

「インタビュ어」と大差はない。だが、interviewのほうが広い使用れ方をしている。説明の冒頭にこんな記述がある。

**【間】**(inter) 見る (view)

カタカナで「インタビュ어」と書くときづきにくいのが、inter-view は inter と view の複合語である。つまり、インター・ビューなのである。語源辞典で確かめると、interview は一六世紀の

フランス語 entrevoir に遡るといふ。これは「互いに会う」を意味する。

inter に注目してみよう。この接頭語で始まる語は interview 以外にも実にたくさんある。思いつくだけでもこんな具合だ。

interaction (相互作用)・interface (境界面)・international (国際)・Internet (インターネット)・ネットワークの相互ネットワーク)・interpersonal (対人)・interval (間隔)。

これらの語に共通しているのは、inter が「あるもの」と「あるもの」との「間に」存在することからを指している点である。

「あるもの」の単独の特徴ではなく、複数の「あるもの」の中間に存在する関係をさす。さきほどの単語から、inter 部分の日本語を抜き出してみよう。すると、「相互」「境界」「際」「対」「間」となり、複数の「あるもの」のあいだになんらかの関係があることが見てとれる。

後半の view はどうだろう。「見る」を原義に、見方や考え方、意見、見解といった抽象的意味がある。

つまりインタビュ어とは、さまざまなビューを交換する行為である。インタビュアーとインタビュイー、インタビュする側とされる側とのあいだの関係は対等なのである。インタビュerは対話に近い。対話との違いをあげるとすれば、インタビュer場面はインタビュアーによって設定され、主導権がインタビュアーに委ねられていることだろう。ある一定の目的にもとづいて構成された対話場面がインタビュerである。

インタビュerは対面を基本とするものの、もっと重要な特徴に

同期性がある。「対面」は相互に相手の顔が見えなくてもかまわない。電話インタビュー、リモート・インタビュー、どちらも向き合っている点で共通する。顔が見えるに越したことはないが、より重要なのは、相手の言ったことにその場で反応できる状況である。

## インタビューという状況

インタビューは人間行動の研究でも用いられる。なぜインタビューなのか。

人の行動は見ただけではわからない。その大きな要因が観察者の認知バイアスだ。なかでも過度の内部帰属による影響は大きい。これは、ある行動の背景として行為者の内的特性を過大評価する現象である。犯罪記事で、容疑者を「おとなしい人で、こんなことをするとは思えない」と評する発言を目にした経験はないだろうか。仮におとなしい人でも、状況次第で「こんなこと」もする。もし、そう発言した本人が「こんなこと」をしたら、「だって、そうするしかなかった」と言うに違いない。他者には、その人の行動をめぐる状況はなかなか理解できない。

ある行動の理由や背景を知りたいと思つたら、まずは本人に聞く。もちろん、返ってきた言葉が「本当」である保証はない。本当かもしれないし、嘘かもしれない。だが、本人がそう答えたということは事実である。実際そう思っているとも言えるし、聞かれたから、そう答えたまでも言える。インタビューで大事なな

は、返ってきた内容が真実かそうでないかではなく、こう聞いたらこう返ってきたという事実のほうにある。インタビュイーの答えは、インタビュアーの質問とセットで考える必要がある理由だ。そして、これがインタビューを研究方法として用いる際の原則である。

聞いてもわからないことはある。半面、聞かれてわかることもある。インタビュイーに「聞かれたからわかった!」と言われることはめずらしくない。

インタビュイーは、インタビュアーとインタビュイー、二人のあいだで展開される動的な社会過程である。インタビュアーの質問にインタビュイーが答え(無回答も含めて)、インタビュアーは確認や質問で応じる。聞きたいことからは同じでも、どのように聞くか、どのような言葉で聞くか、また聞き方が同じでもインタビュアーが違えば、またインタビュイーの状態が違えば、インタビュイーの答えも変わる。たとえば、機嫌がいいかそうでないかだけでも答えは変わるはずだ。

学生たちの好きな言葉に「一期一会」がある。「一期一会」と書かれた湯呑茶碗を私にプレゼントするほどである。インタビュイーはどれ一つとっても、その場かぎりのできごとであり、再現できる保証はない。

インタビューの一回性を示唆する研究がある。二つほど紹介しよう。

一つは、質問―回答パラダイム(QAP)にもとづくSeminar and De Poot (1997)の研究である(The Question-answer para-

digm. *JSP*, 73 (3), 472-480)。

「なぜ犬を飼うの？」と動詞表現(行為型質問)でたずねたときと、「なぜ犬が好きなの？」と形容詞表現(状態型質問)でたずねたときとは、回答パターンが異なる。

行為型質問では「犬との付き合いが楽しいから」と、テーマに言及する傾向がある。それに対し、状態型質問では「犬はわたしのよき理解者だから」と、対象に言及する傾向がある。知りたいことからは同じでも、行為型質問でたずねるか状態型質問でたずねるかで、答えが異なる。

騒音も回答行動に影響を及ぼす (Rubini, M. & Kruglanski, A. W. (1997). Brief encounters ending in estrangement. *JSP*, 72 (5), 1047-1060)。騒音状況は、インタビューを早く切り上げたという欲求を高めるので抽象的質問が好まれる。回答が抽象的で短くすむからである。半面、このタイプの質問には、インタビュアーへの好意度を低下させる効果がある。そのため、もし聞くのであれば最後に持つてくるのがいい。「あなたにとって、○○とはなんですか？」という抽象的質問で締めるのは、理にかなった行為である。

研究方法としてのインタビューには、インタビューが質問の意図を明確に伝えられるという特長がある。質問紙調査では、書かれていることがすべてで、回答者がその設問をどう理解したか、調査者は知りようがない。だが、インタビュー調査であれば、その場で、例えば質問の趣旨を説明でき、インタビュイーの疑問に答えられる。こうしてインタビュー、インタビューとも相

手の考えや気持ちの的確な理解に近づける。

## インタビューなら教えられる

コミュニケーションは教えられなくても、インタビューなら教えられる。そう学んだのが、「フィールドワーク」の授業だった。インタビューは、一定のテクニックを身につければできるようになるからだ。

最後に、インタビュー教育の例として、かつての授業内容を紹介しよう。

以下は、私がインタビュー法の授業で使用していた教材の抜粋——インタビューの手順、インタビューの基本姿勢、文字起こし稿の基本、インタビュー稿の基本——である。実習に用いたプリントを付録1に、ある授業での受講生の感想を付録2に載せた。

### インタビューの手順

- 1 インタビュアー・テーマについて下調べをする
- 2 インタビュアーの準備具合はインタビュイーにすぐわかる。
- 3 インタビュイーのストーリーを考える。
- 3 試行インタビューを行い、その結果をインタビュイー・スケジュールに反映させる
- 4 自分一人の考えには限界がある。
- 4 本インタビューを実施する

- ・録音を基本とする。
- ・二、三十分を一回のめやすとする。
- ・相手との信頼関係、すなわちラポールを築く。具体的には、自己紹介、インタビュー趣旨や記録の取り扱いを説明し、録音の可否を確認する。
- ・相手が理解できる表現で聞く。
- ・相手の話を中断しない。
- ・インタビュー終了後のおしゃべりも適宜メモしておく。
- 5 文字起こし稿を作成する
  - ・記憶の鮮やかなうちに整理する。
  - ・記録は本人に見てもらい、確認を得る。正確を期すため、そしてプライバシーを保障するためである。本人から削除依頼や追加要請があるかもしれない。同時に、不明点を確かめる機会でもある。
- 6 読者を想定したインタビュー稿を作成する

### インタビューの基本姿勢

- 1 インタビュイーはいつでもインタビューをやめられる
- 2 インタビュイーは話したいことを何でも話せる
- 3 相手への関心を言葉や態度で示す
  - ・踏み込みすぎない。尋問ではないのだから、何か言うたびに「それはどうですか」と追及しない。
- 4 むりに共感する必要はない。だが、耳は傾ける（傾聴する）

・「もし自分だったら」と、自分に置き換えて考える。

・そういう考えや行動に至った理由や背景をたずねてみる。

5 受容することに条件をつけない（下記のbのような反応が望ましい）

・例「あなたの大阪生活はいかがでしたか？」との質問に対し、相手は「大阪での生活と言っても別に東京と変わらないですよ。同じ日本ですから」と答えたでしょう。その場合、インタビューには、a、b二つの反応がありうる。

a インタビュイーは斜に構えている。答える気があるのかなあ。

b 「東京と変わらないのですか？ どのように変わらないのですか？」と質問を重ねる。

6 「開かれた」質問を基本におく

・「閉じた」質問とは、「はい」「いいえ」で答えられるような質問をさす。

7 おうむ返し、言い替え、要約といった「繰り返し」を適宜はさむ

8 話の流れを尊重する

9 インタビュアーの話す量は半分を上回らない。めやすはインタビューが三割、七割がインタビュー。

### 文字起こし稿の基本

- 1 逐語録を基本とする
  - ・三〇分のインタビューで五千字ぐらいになる。

- 2 必要に応じて、言い回しを再現する
- 3 要約しすぎない
- 4 個別情報や個人情報扱いは、特定することの価値と負の影響の両方を考え、最終的に表現を決める
- 5 インタビュー場面の雰囲気なるべく伝わるように書く
  - ・(笑) のような非言語表現が役に立つ。
- 6 インタビューの基本データを記す
  - ・実施日時と場所、インタビュアー。
  - ・インタビュアーのプロフィール(適宜、依頼した経緯も含める)。

#### インタビュー稿の基本

- 1 インタビュー稿は作品であり、実際のインタビューそのままではない
  - ・録音や録画の再現では読者に理解されない。
  - ・われわれが目にするインタビュー稿は再構成されたものである。
- 2 インタビュー稿の意義
  - ・読者がインタビューに直接会う機会はずくない。インタビュアーが仲介者となって、読者がインタビュー場面に同席しているかのように伝えることが求められる。
- 3 インタビュー稿は大きく、次の三タイプに分かれる
  - ・会話型(質問と回答のペア)
  - ・問はず語り型(独白調)

- ・「図と地」型(回答が地の文に埋め込まれる)
- 4 インタビュー稿の見本
  - ・立花隆+立花ゼミ(編) 1998 / 2001 『二十歳のころ』新潮社(単行本のほか、文庫でも出ている)。大学生が有名無名の老若男女六〇名に二十歳前後のときのようすをインタビューした記録集である。もとはゼミで作った冊子、それが商業出版された。本書には、上記三タイプのインタビュー稿が使われている。

#### インタビューは学べる

インタビューはコミュニケーションの一形態であると同時に、心理学においては質問紙法や実験法と並ぶ研究方法の一つである。どちらの文脈でもインタビューの価値は高い。コミュニケーションの基本を意識させ、その人の宇宙を理解することにつながるからだ。

コミュニケーションのはたらきは、つきつめると「表現と伝達」。過程としてのインタビューには、表現と伝達にかかわるさまざまな局面が含まれる。インタビュー・スケジュールという名 の話題設定から始まり、対話と傾聴、音声記録の文字化(文字起こし稿の作成)、そして読んでもらうための文章(インタビュー稿)の作成、これら一連の作業はコミュニケーションの総合学習のようでもある。

インタビューはいまどこでも学べる。なかでもおすすめは、E

インタビューとコミュニケーション

テレの「SWITCHインタビュー 達人達」である。番組の前半と後半でインタビューアールとインタビューイーが入れ替わる。出演者は同じでも役割を交替すると話の展開も異なる。そのようすが実際に見られる（毎週土曜日の午後二〇時からの一時間番組）。あなたの好きな人が出演するかもしれない。インタビューの記録であれば、新聞や雑誌、インターネット、と入手範囲は広がる。インタビュー教材には事欠かない。

インタビューはどこでも学べる。あとはインタビューするだけだ。

付記 インタビュー記録の作成について、別稿（川浦康至（2019）インタビューを書く、コミュニケーション科学、50、一三四―一四〇）で詳しくふれた。お読みいただければ幸いです。

〔川浦康至（2020）インタビューとコミュニケーション コミュニケーション科学、52、一一八―一三〇〕



インタビュー実習

コミュニケーション科学  
五二号

1. 実習の流れ

(1) 3人 (A、B、C) で話し合ってインタビューのテーマを決める。

テーマ \_\_\_\_\_

(2) 順番を決める。

氏名	セッション1	▶ セッション2	▶ セッション3
A	聞き手	話し手	観察者
B	話し手	観察者	聞き手
C	観察者	聞き手	話し手

(3) セッション1を行う (7、8分程度)。

(4) 終わったら、《2. 気づいたこと》を書く。

(5) セッション2 → (4)、セッション3 → (4)。

(6) 全体をふりかえり、いいインタビューの条件について話し合う

2. インタビューで気づいたこと

(1) 聞き手 (インタビュアー) として

(2) 話し手 (インタビュイー) として

(3) 観察者 (オブザーバー) として

3. インタビュー実習の感想

## 付録2 受講者の回答（抜粋）

以下は、「付録1」の2および3に書かれていた内容である。

## 1 インタビューで気づいたこと

## (1) 聞き手（インタビュアー）として

- ・話題を変えないで相手の話を掘り下げていくと、話が盛り上がった。
  - ・相手が話しやすいように相槌が打てた。
  - ・相手が気持ちよく話せるよう、うなずくことを意識した。
  - ・相手の発言をより深めるための質問がむずかかった。
  - ・相手の話を聞きながら、次の質問を考えるのが大変だった。
  - ・質問責めになってしまった。
  - ・相手の答えを広げて聞いたら、話がありあがった。
  - ・相手の答えをいかに広げるかが重要。
  - ・相手に興味を持ち、相手の話をよく聞くことが大切。いい雰囲気を保つためには相手に対するリアクションが欠かせない。
  - ・相手の目を見て話を聞くと、より相手のことを理解できるような気がした。盛り上がりすぎて脱線、インタビュアーであることを忘れそうになった。
  - ・相手が話しやすいように笑顔で聞くようにした。もっと細かな質問だったら、答えやすかったのかな。
- 
- ・掘り下げていくのが楽しかった。
  - ・聞きたいことが多く、グイグイしすぎて、相手の考える時間を減らしてしまった。適度な量とテンポが大切。
  - ・テーマをしっかり決めていたので、とてもスムーズにインタビューができた。
  - ・いろいろな話が聞け、楽しかった。
  - ・話の量を、インタビュアー四割、インタビューイー六割と、ほぼ達成できた。
  - ・相手がおしゃべりな人で、一を聞くと十返してくれた。
  - ・相手の話をよく聞いていないと話を深めることができない。
  - ・相手の話を整理するのに苦労した。
  - ・相手のことをよく知らないと、質問できない。
  - ・自分が気になったことを積極的に聞いて、話を広げることが大切だ。
  - ・自分が詳しくない分野の話になると、質問がむずかしくなる。
  - ・自分の知らない分野のことをこまかく話してくれたので、「知りたい」気持ちが高まり、ずうっと聞いていた。
  - ・準備不足で事前知識がなかったため、よい質問ができなかった。
  - ・閉じた質問では話はずまない。
  - ・質問しても、「わからない」「知らない」という答えが多かったので、質問の数だけが増えた。
  - ・決まり切った質問しかできなかった。

## (2) 話し手（インタビュイー）として

- ・身近なテーマだったので話しやすかった。
- ・インタビュアーが舵を取ってくれているときに話しやすかった。
- ・インタビュアーがすごく楽しそうに聞いてくれたので、たくさん話したくなり、時間が足りなくなった。
- ・インタビュアーがどんどん突っ込んできてくれたので、話しやすかった。
- ・相手がしっかり聞いてくれ、話しやすかった。逆に質問してくれなかったら、話すことがなくなってしまう。
- ・つきつきと、しかも突然あることを聞かれ、答えるのに必死だった。
- ・話したいことが多すぎて、まとまりなく話してしまっただが、インタビューのことを考えて頭の中で整理して話すようにすればよかった。
- ・ちゃんと質問に答えられているか心配になった。
- ・こちらの話した内容に合わせて質問してくれたので、答えやすかった。
- ・インタビュアーが何を聞きたいのかをくみとることが大切。詳しく答えることも大切。
- ・インタビューの聞きたいことをくみとるのに苦労した。
- ・聞かれた以上のことを話すようにした。
- ・インタビューしやすいように、全部を話すのではなく、質問するスキマをつくって話した。
- ・言葉にして伝えるのが難しかった。

- ・インタビュアーの目を見てちゃんと話した。
- ・自分の話したいことを話せ、楽しかった。
- ・互いに共通点のあることがわかり、よかった。
- ・インタビュアーが自分の興味のあることについて、どのくらい知識を持っているか、どう知らないのかわからないので、どこまで詳しく話すべきかわからなかった。
- ・難しい質問のとき、どう答えればいいのか困った。
- ・具体的なことを聞かれると話しやすい。
- ・質問がその直前の話とつながっていたので、相手がよく理解してくれているを感じられた。
- ・テーマに対する関心が相手と同じぐらいだったので話しやすかった。
- ・インタビュアーが自分の濃いエピソードを話してくれたので、質問の意図がよくわかった。
- ・はっきりと聞き取りやすい声で話した。
- ・一言で済ませないで、いろいろ話してインタビュアーが質問しやすいようにした。
- ・なるべく詳しく話して、相手が新しく質問したいことが出てくるようにした。
- ・自分のことを話すのは少し恥ずかしかった。
- ・聞くのも楽しいけど、聞かれるのも楽しい。
- ・インタビューは、自分のことをあらためて考えるよい機会になった。
- ・自分を見つめ直すことがインタビューとして大切なことだ。

・質問されて「そう言えば考えたことなかったな」と思うことがいくつもあった。

(3) 観察者(オブザーバー)として

・相槌のようなインタビュアーの反応は大切。  
・相槌は効果的だ。

・インタビュイーの言ったことにしっかり対応しているのがよかった。

・インタビュアーの質問のしかた一つで、インタビュイーの話は左右される。インタビュイーはインタビュアー開始時より笑顔が増えていた。

・自分だったらこう質問するなと思っても、違う質問をしたり、違う切り口だったり、話が広がったり、おもしろかった。

・自分が思いつかない質問をしていた。そういう発想もあるのか！

・インタビュイーの後にオブザーバーをやった。質問を繋げながらインタビュアーが進むことを確認できた。

・話すのはインタビュイーだけど、インタビュアーが質問しないと盛り上がらない。インタビュアーの役割は大切だ。

・インタビュアーが質問してばかりだと、インタビュイーの話のスキルに依存することになり、深い話を引き出すのはむずかしいのではないか。

・途中で話に加わりたくなかった。二人の会話を聞きながら、こういう聞き方をすればいいのかと考え、とても勉強になった。

・自分だったら、こういう質問をしようとか、いろいろ浮かんできた。本番での参考にしたい。

・観察している間、質問したいことがたくさん出てきたが、話せないのでもつらかった。

2 インタビュアー実習の感想

・インタビュイーとしてはいろいろ引き出してほしかったので、インタビュアーはいろいろ引き出しを持っておくべきである。

・今まで何の知識もなく聞くだけだったが、あらかじめ調べておいたので、いろいろ聞けた。

・下調べの重要性を痛感した。

・下調べと、相手に興味を持つことがインタビュアーの基本。  
・インタビュアーがインタビュイーに興味を持ち、しっかりと聴くことがより深い話を引き出す第一歩である。

・インタビュアーが終わってから、これも聞けばよかったなという部分があった。

・インタビュアーって意外に話が進む。  
・一般的質問から個別的質問に進むと、話がずれない。

・話の理解度が増すと、会話が盛り上がり、楽しい。  
・掘り下げて聞くと、話がたくさん聞ける。

・インタビュアーがおもしろい質問をしていたので、自分もそんな質問ができるようになりたい。

・インタビュイーも質問することで、話の幅が広がる。

- ・インタビュアーがちゃんと質問を掘り下げていけるかが大事。
- ・相手の話に自分の話題を盛って話すと、より盛り上がる。
- ・相槌で相手に興味を示すことが大切。インタビュイーとしては相手により多くの情報を提供できるように、ちよつとしたエピソードを加えると、一問一答に終わらない。
- ・インタビュアーのときもインタビュイーのときも、自分が話しているとき、ちゃんと身体を向けて目を見て、聞いてくれ、うれしかった。
- ・具体的に聞くことが大事。
- ・聞き上手でありたい。
- ・うなずきや笑いはインタビュースる上で大事な要素である。
- ・インタビュアーの相槌はタイミングや仕方がむずかしい。適度な頻度がいい。
- ・インタビュエーターマは大切だ。テーマに合った人を選ぶか、その人に合わせてテーマを調整するか。それが問題だ。
- ・インタビュアーの舵取りに左右される部分が大い。
- ・話すほうも聞くほうも話を広げる努力がいる。
- ・要領が悪い私にはインタビュは向いていないかもしれない。
- ・でも、きちんと準備をすれば、ある程度改善できる。
- ・インタビュアー、インタビュイー、オブザーバー、いずれも経験する機会がなく、新鮮だった。オブザーバーとしては話を聞くだけでおもしろかった。
- ・ふだん話す機会のないテーマだったので、いろいろ聞けてうれしかった。

- ・ふだん聞けない話がインタビュであればできる。
- ・ふだん聞きたいと思っていたことが聞けた。
- ・最初の話題が、その後のインタビュを左右する。